

1996年12月24日発行
早稲田大学大学院文学研究科ドイツ文学専攻
Angelus Novus 第24号抜刷

ニコラス・ボルン
『群衆の中であってなおかつ
どの一人もが現れるということ』

杵渕 博樹訳

社会的行為としての詩作と
「継続する物語」の終わり
—ニコラス・ボルンの詩が語るもの—

杵渕 博樹

ニコラス・ボルン
『群衆の中であってなおかつ
どの一人もが現れるということ』

杵渕 博樹 訳

Das Erscheinen eines jeden in der Menge

Ist es eine Wohltat allein zu sein
im Gelage der Gedanken ohne Augenzeugen
ohne das Auge des Entdeckers das sieht wie's schmeckt
ohne das geübte Ohr der Menge?

Was ist eine Tatsache wert die unteilbar ist
was ist ein Universum ohne dein Beben
ohne dein Erscheinen vor leeren Sitzreihen?

Die Menge geht auf der Erde
und nichts vergeht in der Menge
auf den Rücken summender Webstühle
erreichen wir den großen Widerspruch:
das Erscheinen eines jeden in der Menge

Fortsetzungsgeschichte

Früher war der rote Faden eine Blutspur

es gab Momente der Ruhe und der Sammlung
sogar im Feuer.

Still lagen die Körper bei Sonnenuntergang
die überlebenden Erzähler würfelten.

Inzwischen ist der Tod vorgedrungen bis zu uns
aber wir sind weniger gewarnt
—keine Witterung mehr.

Ich frag mein Bein ob es Bescheid weiß
meinen Bauch meine Hände mit denen ich
meine Fortsetzungsgeschichte füttere und streichle.

Große Erzählerschlachten sind in meine Wände
geritzt

Strahlen prasseln auf mein Haar
an den Gelenken werden Uhren alt.

Diese Minuten in denen ich dies aufschrieb
bleiben erhalten wie alles was vorbei ist.

Heute bist du dran morgen ich und beide sind wir
lange her.

Meine Fenster blicken noch in die Welt
nicht unähnlich der Welt
wie sie in meine Fenster blickt.

Unter der Kopfkrümmung ist alles begraben
der Anblick der nassen Dächer trocknet schnell.

Wahn summt in der Etagenheizung
Wahn zehrt vom Hund in der Hundegeschichte.

Ich spüre noch Möglichkeiten:
einige Tierleben.

Träume frottiere ich aus dem Gesicht
der Bimsstein liegt auf dem Wannenrand wie gestern
aber vieles ist niedergelegt und abgeschrieben
seitdem.

Hier ist das Wort *hier*
wo ich sitze nämlich
wo der Mitmensch mir den Hinterkopf anbietet
wo ich gestern Cola verschüttet habe
—man sieht es noch auf den Bodenplatten.
Ich habe einen Beutel Schmierseife gekauft
und heute morgen einem Handwerker eine gewöhnliche
Bemerkung gemacht
«so geht das» oder so ähnlich.
Auf die Dauer sagt man mit allem etwas.

An der Geschichte ist das beste daß sie genau
bei uns aufhört
obwohl viele noch mitschreiben.
Ich muß mir immer die Welt ohne mich vorstellen
es muß sein
und wie unverschämt ich oft den Nachkommen
zuvorkomme.

Einst habe ich «einst» geschrieben und schreibe jetzt
wieder «weiße Wände»
meine geheimen Fortsetzungen
meine Wärme die mich an nichts als Kälte erinnert.

Mit uns macht die Geschichte Schluß.
Am genauesten sieht man sie wenn der Zug
langsam entlangfährt an den Rückseiten der Städte
Lagerhallen Höfe, die Kehrseite der Wäsche
und der Blumenfenster
die erdabgewandte Seite der Geschichte.

Dienstag, 16. August 77

Lag oder stand ich da auf meinem Zimmer
wußte nicht mehr
gerade jetzt konnte nicht mehr, nicht mehr sagen was
vor Nichtkönnen, heller Sonne, Nicht-mehr-wissen
was selbst ist oder war
wollte laufen laufen einen Hofrundgang
nervös und sah Wolken an, warum Wolken
die wußte ich auch nicht mehr, nur «Wolken» ,
wo der Dampf her, wo das Blau her, das verfluchte Blau
stotternd kam ich
auf mein Bett, hab nicht gewußt

was muß getan werden? Da kämmte ich mein Haar

kämmte, rote Ziegeldächer, mir war dann schön mit
Zigarillo im Mundwinkel, wußte aber nicht
vor Nicht-mehr-können, konnte nicht wollen mehr.
Bücher, Notizbuch von der Reise, ich blaues Hemd
ich Licht im Hof, schwarze Hose, Geschichte einer Liebe
nickte mir aufmunternd. Wie schnell einer hier und da
vernünftig wird, wie einer glatt wird stellenweis
innen im Hals, Unterdrückung wo, Zwang weiß nicht mich
Schmerz weg oder weiß ihn nicht mehr.

Da lag ich da, wo's nicht mehr weiter weiß, verstreut
vor weiter Wissenschaft, wie Tauben auf der Dachrinne.
Ein Busch Blumen wurde eingeschlagen in Papier
Geld in der Hosentasche gegen Tablettenröhrchen.

Schallplatte aus Fenster geworfen, da schien es besser
verständlich daß es Schallplatte war. Gedanke rot
und grün war da und wieder weg bevor ich wußte, war es
Reise, war es nichts oder Bücherlesen
war es Mutters Geburtstag?
Ein Stück Seife neu war in der Hand, Zitronenfalter flog
aus der Welt auf mich.
Aufsatz über verrücktes Wissen las ich, sofort danach
hingesezt und versucht zu schreiben.
Um halb sieben nach Hause gefahren zu Frau und Kindern.
Unterwegs die Häuser alle hatten weiße Fenster.

「群衆の中であってなおかつどの一人もが現れるということ」

一人でいることは慰めだろうか
観念のどんちゃん騒ぎの中 目撃者もなく
それがどんな味か見抜く発見者の目にも見られず
群衆の肥えた耳にも聞かれずに。
分かちあえない事実に何の意味があるだろうか
おまえの震えなしの
空っぽの客席の前におまえが現れることもない宇宙に。

群衆は地上を行く
そして群衆の中では何一つ消え失せはしない
ブンブン唸る機織り機の背中で
僕たちは大いなる矛盾にゆきあたる
群衆の中であってなおかつどの一人もが現れるという矛盾だ

「継続する物語」

以前 赤い糸は血の跡であり
砲火の中であってさえ心静かに落ちつく瞬間があった。
落日にあたってからだは静かに横たわり
生き残った語り手たちは賽をふった。

そのうち死が僕らのところまで広がってきた
だけど僕らはあまり用心しなくなっていた

—もう勤づくことなんかできなかつたのだ
僕は足にどうしたことなんだかわかるか聞いてみる
それから腹と手に そいつらでもって僕は
僕の連続物語を養い 撫でまわしているのだが

僕の壁には語り手たちのたいへんな戦いが刻みつけられている
光線が僕の髪に音を立ててふりかかり
関節では時計が古くなる。
僕がこれを書きつけるこの数分間は
過ぎ去ったすべてのものと同じように保たれている。
今日は君の番 明日は僕 そして僕ら二人とも
もうずっと昔から。

僕の窓はまだ世界の中へ目を向けている
世界が僕の窓の中を見てると似てなくもない。
うなだれたその先にすべてが葬られている
濡れた屋根の眺めはさっさと乾いてゆく。
妄想はフロア暖房の中をブンブン飛び回り
妄想は犬物語の中で犬を喰って生きる。
僕はまだ可能性を感じている。

それはいくつかの獣の生だ。
夢を僕は顔からこすり落とす
軽石は湯船の縁に昨日のままにのっている
しかしそれ以来多くが書きとめられ書き写された。

ここにその言葉ここがある
つまり僕が座っているところ
隣人が僕に後頭部を見せたところ

昨日僕がコーラをこぼしたところに
—そいつはまだ床の上に見える
僕は一袋の石鹸を買った
そして今朝はある職人にありきたりなことを言った
「そんなふうにするのか」とか何とか。
あらゆることについて何かを言い続けているのだ。

物語の一番いいところは それがまさに
僕たちのところでとぎれるということ
まだたくさんの連中が執筆に参加しているにもかかわらずだ。
僕はいつも僕抜きの世界を想像しなければならない
そうしなければならないのだ
そして子孫たちの先に行く僕はしばしば何と恥知らずであることか
かつて僕は「かつて」と書き そして今僕は
また「白い壁」と書く
僕の秘かな連続
冷たさ以外のものを想わせない僕の温もり

僕たちで物語は終わる。
物語が一番よくわかるのは列車が
街々の、大きな倉庫の、農場の裏手に沿って
ゆっくり走るときだ 洗濯物の
そして花のある窓の裏側
物語の 地にそむく側面。

「77年8月16日火曜日」

横になってだったか立ってだったかそこのおれの部屋で
もうわからなかった
まさにその今もはや、もはや何か言うなんてことはできなかった
できないということを前にして、明るい太陽を、もはや・わから・ない
を前にして
それ自体が何なのか あるいは何だったのか
おれは歩きに歩きたかった 裏庭をグルグル
神経質になって雲を見つめ、なぜ雲なのか
そいつももうおれにはわからなかった、ただ「雲」、
あの蒸気はどこから、あの青はどこから、あのとんでもない青は
どもりながらおれは
おれの寝床に戻ってきた、わからなかった

何がなされねばならないのか、そこでおれは髪をとかした
とかした、赤いレンガ屋根、それから気分がよくなった
口のすみに葉巻をくわえて、でもわからなかった
もはや・でき・ない を前にして、もはやなにをしたいとも
思えなかった。

本、旅のメモ、おれ 青いシャツ
おれ 裏庭の明かり、黒いズボン、ある愛の物語
励ますようにおれにうなずいてみせた。一人の人間が
どんなにかさつさと
おりにふれ理性的になることか、ときおりはそっけなくなることか

喉の中、どこかでこらえてる、抑圧の方がおれを知ってるって
わけじゃないが

痛みは去ったのかあるいはそれをおれは知らないのか

そこにおれは横たわっていたそこに、もうわからないところに、
まき散らされて

広大な科学の前に、雨樋の上のハトみたいに。
一叢れの花が紙に包まれ
ズボンのポケットの中にはクスリの小瓶を買う金。
レコードは窓から放り出され、そのときは余計
それがレコードだってことがよくわかった。赤と緑の思想が
そこにあつておれがそれとわかる前にまた離れちまって、それは
旅だったか、それは何でもないかあるいは本を読むことだったか
母親の誕生日だったか。
石鹸が一つ新しく手の中にあつて、レモン色の蝶が
世界の中からおれへ飛んできた。
狂った知識についての論文をおれは読み、そのあとすぐ
座って書いてみようとした。
六時半に妻と子供たちのいる家へ向かった。
その途中 家々の窓はみんな白かった。

*今回の翻訳の底本は、

Nicolas Born : Gedichte. Reinbek (Rowohlt), 1983.

社会的行為としての詩作と
「継続する物語」の終わり
—ニコラス・ボルンの詩が語るもの—

杵淵 博樹

ここに訳出した詩のうち、「継続する物語」と「77年8月16日火曜日」は、『誰も自分のためではなく皆誰のためでもなく Keiner für sich, alle für niemand』(1978)¹⁾から、「群衆の中にあつてなおかつどの一人もが現れるということ」は『発見者の目 Das Auge des Entdeckers』(1972)からとっている。ボルンには四つの詩集があるが、前者はそのうち最後のもので後者はその一つ前、つまり三番目のものである。

ボルンの公式の文学上のキャリアは1964年の共同執筆による実験的小説に始まるが、単著としては1965年の小説『二日目 Der zweite Tag』(1965)が最初である。しかし小説家ボルンはその後十年余り主に詩人としてしか活動しなくなる。1967年に第一詩集『市況 Marktlage』が、1970年に『おれの頭のあるところ Wo mir der Kopf steht』が、そして1972年に上述の『発見者の目』が発表された後、久々の小説『物語の地に背く側面 Die erdabgewandte Seite der Geschichte』が世に出ることとなる。彼が亡くなる1979年には、最後の小説『欺瞞 Fälschung』が発表されている。

彼の作品には詩と小説を通じて一貫したものがある。最も重要な手法は、事象や人物、事件などの常識的意味体系からの切り離しである。一種の「主観的」姿勢の強調とも言えるが一実際エゴ中心主義的な「新主観主義」と見なされることも多い一、この手法によって彼は、押しつけられた意味世界への抵抗を試みていると言える。生活の中で体験するあらゆる物事を、それらとの接触に際して、それらの側から要求してくる意味に屈従

するのではなく、飽くまでも彼という個人の側からの感覚的受容を基にして、瞬間に定着させるのである。

ただし彼は、そうすることで最終的な真実に到達できると考えているわけではない。そのような静的な終着点は前提になってはおらず、むしろ、自己の外部から作用する何らかの力によって強制された意味を拒み、それを相対化するような過程を反復すること自体が目的なのである。最初の小説『二日目』における、語り手が目的地のはっきりしない旅の報告をするという設定、そして主にどちらかというありふれたエピソードの羅列は、通常の意味連関からずらされた事物がもたらす非日常のよそよそしさを表現している。ここでは主に一種の決まり文句によって構成された記憶や観念と体験される現実とがほとんど等価で扱われる。それが強調されることで生じる違和感は、普段意識されることの少ない、もはや生活の前提となってしまう意味体系の恣意性を読者に予感させる。このような構造は第一詩集『市況』で用いられる主な方法の一つにそのまま生かされている。すなわち、ある仕方で切り取られた日常の瞬間が持つ、身近さとよそよそしさの同居する意味の揺らぎの表現である。また、ボルンの特性としても一つ注目すべきなのは、個人的体験というフィルターを通した世界の眺めの定着にあたって、政治的言説を排除しないことだ。あふれる情報の一環として、政治の決まり文句の断片をも彼は好んで詩の中に散りばめてゆく。

第二詩集『おれの頭のあるところ』では、詩のあり方、書くことの意味自体がテーマとして目立つようになる。彼は間違いなく社会の中で詩がどのような役割を担いうるかという問題を念頭に置いており、安易な答えは出さないものの、少なくとも詩が世界に満ちた他の言葉から独立して存在することはできないということを強く意識しているように見える。また、この詩集では、現代史的政治状況が作品に大きな影を落としている。これらの点には、70年代のエッセイで彼がよく取り上げるような、政治と個人、テクノロジー批判、ユートピアなどのテーマに通じる問題意識が感じ

られる。ただ、個人としての自己を確認しようとするときの疎外感は、相変わらずここでも基本的姿勢となっている。

第三の詩集『発見者の目』では、それまでに扱われてきたテーマや手法に、ある種の「美しさ」を求める姿勢が加わる。決して最終的答えに行き着かない、世界との接触のその都度の定着こそがボルンにおける詩であり、その反復こそが目的であり、それはまた不可避免的に社会的行為なのであるとすれば、そこに「美」という価値を求めることは、生それ自体、世界それ自体の肯定の可能性の模索である。未だ実現しない何かを発見し、その発見の瞬間を定着させようとする、その行為自体に意義を与えようとするのが、おそらくここでの彼の姿勢の特質であろう。断片化され、解体された「世界」が、彼の主観的体験という舞台の上を陰鬱に通過しながら、未だ別の構成を与えられないままに、ずらされた世界の出現を演ずるのである。

しかし、最後の小説『欺瞞』は、戦争とそれを取材するジャーナリストを描きながら、決して真実は伝えられないということ、そしてそんな普遍的「真実」がありえないことを訴える悲観的なものになっている。無論『発見者の目』におけるボルンにしても決して楽観的ではないのだが、この小説では上述のような「美しい詩」の概念が立ち入る余地はありそうにない。最後の詩集「誰も自分のためではなく皆誰のためでもなく」の背景にはこの小説に見られるような認識がある。彼を見る「世界」に関する一種の報告でもある彼の詩は、報道の問題にも密接に係わっているのだ。押しつけられた嘘を暴く作業、そしてその過程を報告する作業の自覚は、個人を屈従させ、押しつぶそうとする巨大な力との戦いでもあったわけだが、戦争を「伝える」ジャーナリズムの現実とは、書くことの日常に立脚する「詩」に更なる課題を突きつける。戦争は特殊な極限状態かもしれないが、それが地球上のどこかで常に存在し続け、一見それとは関係のない場所でも、実際には様々な形での密接な係わりがあるという状況は、テクノロジーの巨大化、高速化によって更に強化されつつある。今日的状況にお

いては、戦争のような非日常が「日常」という幻想の裏側にベツトリと張りついているのだ。場合によっては隠された、あるいはなかなか見えてこない「事実」を伝えようとする努力を前提にしたジャーナリズムの言葉は、解体された「日常」を通して「日常」の「裏側」を伝えようとするボルンの詩の言葉と構造的な類似性を持っており、自ずから一定の問題性を共有しているが、ボルンが懸念しているテクノファシズムの問題³もまた、詩を書くことの意味に影響を与えずにいないのである。

「群衆の中であってなおかつどの一人もが現れるということ」は、主観的・私的な視点を武器に強制力を持つ意味世界に対抗しようとするボルン自らの方法に関する一つの自問であると考えられる。ボルンは発信者としての自分を半ば群衆の中に、半ば群衆の外に立たせながら、それぞれの個人においてしかありえない世界の動的な出現を語り、詩を書くことでの意味の可能性と限界を描いているが、特に目立つのはコミュニケーションの一つのあり方としての詩というイメージである。また同時にこの作品は、各構成員の自由な個性が損なわれないような集団のあり方、という民主主義的なユートピアを巡る問題を暗示していると言えるだろう。

「継続する物語」は、「群衆の中であって……」でも触れられていた、「何一つ失われることなく」生起し続ける一人一人の主観における「世界」の、詩人における一典型を描くものであると言えよう。だが、ここで最も特徴的なことは、第一節で既に明らかになる、「血」や「死」を伴う生々しい戦いのイメージである。そして第二節では早くもある無力感が告白される。その後で静かな絶望とかすかな希望のトーンにおいて語られるのは、書くことによって「物語」としての世界を定着させることでしか確認できないような生のあり方であるが、そこで注目すべきなのは、「隣人」、「職人」、「たくさんの連中」など、現在におけるいわば彼の同時代人の存在の自覚であり、「子孫」と「僕」(及びその同時代人)との対比である。同時代人の存在の殊更な強調が示唆するのは、よそよそしい状態

でしか使用できない「言葉」ではあるが、それは明らかに他の人間との間にあって始めて「物語」となりうるのだということである。意味を形成しないことによって確保される「物語」の意義は、人間の存在の中心に予感される無意味によって「世界」の内実を埋め尽くすことなのだ。また、「子孫」と「恥知らずな僕」の対比は、テクノロジーの巨大化に伴って加速度的に進むコンピュータ管理がもたらすテクノファシズムと原子力利用に対するボルンの危機感³と切り離して考えることはできないだろう。ただし、「意味」の体系が作用させる巨大な暴力に対する抵抗を語りながらも、ボルンは自らの無力感を隠そうとしない。彼は「裏側」から「裏側」へと「物語」を救おうとする一方で、不毛な未来の予感に「物語の終わり」を告げずにはいられないのだ。既に本来的に「とぎれ」ており、一定の方向を持った展開を放棄させられている、言い換えれば、一つの否定を経て別の可能性の模索の試みとしての性格を帯びているボルンの「物語」であるが、その「物語」さえ、「僕たち」をもって「終わら」ねばならないのだ⁴。

「77年8月16日火曜日」は、「継続する物語」で概観された戦いの、一つの具体的な現場からの報告として読むことができる。日付をタイトルにする手法をボルンは他でも使っているが、これは実在の人物名をタイトルにしたり、詩の中に登場させたりする手法同様、作品の詩人自身の「物語」としての性格を強調している。無意味において世界を捉えなおす作業の過程では、詩人自身の日常が意味世界の限界を認識しようとする試みと化すことがうかがえる。できる限り「わからない」状態に止まること、つまりそれが「わからない」状態だということが自覚できるぎりぎりの範囲に踏みとどまることが、ここでの彼の戦術である。そして詩人にとっては意味を失っていく世界の断片が、読者にとっては飽くまでも日常的な身近さと具体性の痕跡を保持すること、それがボルンの表現が開かれたものになるための条件である。このような詩による一種の「報告」は、無意味において確保されるべきボルン的人間性の一端をわれわれ読者に伝え、なおかつそのような人間性を体現する一つの現象を用意しているのだ。

それについて今、こうして私が伝えているという事実もまた、おそらくはボルンの考える詩の本質的なあり方に通じる現象であると言えるだろう。

(注)

- 1) この「詩集」は独立した本ではなく、他の詩集とまとめた形で出版された、今回の翻訳の底本として使用した前掲書の最終章として発表されている。ただし当初は„Gedichte 1967-1978“というタイトルだった。
(Reinbek, 1978)
- 2) Vgl. Nicolas Born : Die Welt der Maschine, Aufsätze und Reden. Reinbek, 1980.
- 3) 注2)参照。
- 4) 最終行にある「物語の地の背く側面」は、そのままボルンの小説のタイトルである。このことは、ボルンにおける詩と小説のテーマ的・方法論的重複を暗示している。